

1925 年の‘麗しの東インド’—日本画家古城江観の旅と制作

ディクディク・サヤディクムラッ(九州産業大学)

インドネシアにおける近代美術は、「インドネシア近代美術の父」とも言われるスジョヨノとアグス・ジャヤが、1936年プルサギ（インドネシア画家協会）を結成したことをもって嚆矢とするのが定説となっている。

プルサギがモダニズムをひっさげて登場する以前のインドネシア（当時はオランダ領東インド）美術界にあっては、東インドの熱帯風景を、甘い感傷を込めて穏やかに、かつエキゾチックに、理想化して描く絵画が人気を博していた。スジョヨノは、こうした一群の絵画を「ムーイ・インディ（麗しの東インド）」と呼んで、魂のこもっていないわべだけのものであり、西洋人観光客におもねった絵画であると、激しく批判した。そのスジョヨノの批判以降、こうした絵画を「ムーイ・インディ」と呼ぶことが定着した。

こうした絵画群は、インドネシア近代美術の発展を促す基盤として、一定の役割を果たしたと発表者は考えるが、スジョヨノの厳しい「ムーイ・インディ」批判もあって、インドネシア近代美術研究において、これまでこれらの絵画群が学術的な研究対象とされることはほとんどなかった。

本発表では、「ムーイ・インディ」に関する基本事項を整理した上で、外国からの影響、とりわけ日本の影響がインドネシア絵画に何をもたらしたのかについて検討し、それが、それまでのインドネシア文化や宗教から生まれた芸術とは異なる新しい絵画の型をこの国にもたらし、現代まで続く芸術の基盤となり、また多民族に共通する一つの絵画表現の型ともなったことを実証することを目的とする。

第二次世界大戦以前にヨーロッパへ渡航する途中に、インドネシアで下船した日本人芸術家は少なくない。その中では、ジャワに定住した画家森錦泉が比較的知られているし、洋画家矢崎千代二はスジョヨノに絵画の手ほどきをしたことで、スジョヨノの師として彼の地で尊敬を集めている。

発表者は、これらインドネシアゆかりの日本人画家の中で、これまで研究されてこなかった画家古城江観（1891～1988年）に注目して調査を行った。今回、画家が1925年にバタヴィアへ下船してから出発するまでの1年間の旅路を、彼の遺したインドネシアの新聞、雑誌の切り抜き、彼の撮影した写真など豊富な史料を精査して明らかにするとともに、一人の日本人画家の画業とそのインドネシア近代美術への影響を考察する。

古城江観は、故郷鹿児島で日本画法を学び、1911年21歳の時に上京し、福井江亭の『天真塾』で四条派の勉強に励んだ。1922年秋台湾を皮切りに、11年間各国で展覧会をしながら旅行を続けたが、1925年の1年間バタヴィアから各地をめぐり、現地の日常生活や風景をスケッチや水彩によって描き出した。その日本画を基礎に南方情趣を表現した作品は当時高い人気を集めた。

本研究は、日本軍政期、あるいはプルサギ以前の、日本インドネシア美術交流史研究に貴重な材料を提供すると思われる。